



# さらしなほの里



## 友の会だより

第14号

2006・春



明德寺に向かうお花祭りの稚児行列(大橋静雄さん撮影)

### 白い象をみんなで引っばって

お釈迦さんの誕生日は四月八日だそうです。今からおよそ二千五百年も前のことですから、ホントかどうか誰も知りませんが。

羽尾の明德寺では、四月の第二日曜日に毎年、お釈迦さんの誕生日をお祝いして「お花祭」をしています。このお花祭の呼び物は、稚児行列とそのあとの演芸会です。お稚児さんが羽尾だけでなく広い範囲から集まって来ることや、演芸会を含めた行事を寺の役員だけでなくボランティアの皆さんが骨身を惜しまず進めてくれていることに、住職は自分のことのように時々自慢しています。

明德寺が建っている羽尾四区には、雄沢会というボランティア会があり、毎月「羽尾四区かわらばん」を発行して区民に配っています。「途絶えていたお花祭をもう一度やるじゃねえかい」という声に促されて、二十年前、先代住職夫妻と雄沢会が協力してお花祭が復活したといいます。本堂の片隅に、使い古した花御堂、お釈迦さんがあるので、江戸時代ごろには花祭は行われていたと思われまます。

白いシーツを接ぎ合わせた大きな象は、お釈迦さんのお母さんが白い象が胎内に入る夢を見てお釈迦さんをごもったという言い伝えにちなんだものです。紫の風呂敷に飾りとひもを付けたお稚児さん用のケープなどもあわせて作り、稚児行列のできるお花祭が復活しました。みんなの参加できるお花祭を継承し、伝統を守らなければと思っています。

(真言宗智山派・明德寺住職 塚原弘昭)

第十三回さらけの室。縄文まつりが昨年十月三十日、古代体験パークで開かれました。更級小学校の高学年の子どもたちのまつりへの参加は恒例となつていますが、今回は初めて一年生が主役に匹敵する役割を担ってくれました。子どもたちを導いてくださった田中耕史先生に寄稿していただきました。

昨年度、更級小学校の一年生では生活科の学習で「きび作り」を行ってきました。入学して間もない四月、学校のまわりを探検する学習で古代体験パークに行ってみました。

そこで子どもたちは翠川先生に出会い、「きび」のことを教えてもらい、「自分たちできびを育ててみたい。そしてきびを使ってきびだんごを作ってみよう」という願いをもつことができました。種をいただいたり、蒔き方を教えていただいたりして少しずつ学習が進んでいきました。

学習が進む中で分からないことが出てくると、「翠川先生に聞いてみよう」と子どもたちはもちろん、担任の私たちもいろいろなことを教えていただきました。

秋になると、たくさんきびが実りました。穂を切って収穫し、乾かしたあとは脱穀、精白と進んでいきました。硬いきびの殻に悪戦苦闘しながら、何とかきびだんご作りにこぎつけることができました。

きびだんごパーティーをひらいたときには翠

## 更級小 1 年生が豊穰儀礼の大役

川先生、荒井先生にも来ていただき一緒に収穫を祝うことができました。

### 縄文まつりできびを奉納



収穫がすんだころ、「一年生もせっかくきびだんごを作ったのだから、縄文まつりに一緒に参加してみたら」というお誘いを受け、みんなで参加することになりました。毎年行われてい

る豊穰儀礼の列の後ろから一年生全員できびを奉納しました。

子どもたちは自分たちのことが紹介されたり、たくさんの方が見ている中を奉納したりで、うれしさと緊張が入り混じった気持ちだったのではないのでしょうか。

スタッフの方が作ってくださった縄文服も着せていただいたり、たくさんの方に応援していただいたりして、子どもたちも楽しい思い出ができたのではないかと思います。みなさんありがとうございました。

縄文まつりのあと、子どもたちがパソコンを使って感想をまとめました。

(更級小学校・田中耕史)

「ねんせいなのに、じょうもんまつりにしょうたいしてもらったよ。さいしょはできるか、しんぱいだったけど、やたらほっとしたよ。さいしょはきんちょうしたけど、がんばったよ。おわったら、おかあさんにほめられたよ。(〇)きびをもつと、きびがぼろぼろおこちやっきたよ。かみさまにおそなえするとき、どきどきおもしろいよ。あるくときがどきどきおもしろいよ。(〇;)おかあさんが「キビとさなかつた」とききました。「だいじょうぶだよ」とこたえました。「おかあさんのほうがきんちょうした」っていったよ。わたしもきんちょうしたよ。(〇)キビだんごはおいしかった。!(〇)!



# 人面土器モチーフに灯取り制作

はるか数千年の時をさかのぼり、冠着山の裾野に暮らしていた縄文人たちに思いを馳せる。彼らはどんな生活をしていただろうか…。

さらしなの里歴史資料館ではこの冬、縄文人の知恵袋教室「縄文編物ってなあに？」を十回にわたって開催した。自然の恵みを巧みに利用し、独創的で豊かな世界観を持つ縄文人。これまでやってきた古代布づくり教室を発展させ、現代社会の想像を超えた彼らのすばらしい知恵や技術を、さらに探ってみようという企画だ。

さらしなの里歴史資料館の  
「縄文人の知恵袋教室」

日本各地で出土した縄文時代の布片や土器の底に痕跡として残されたものから、縄文人は驚くほど精巧な編物の技術を身に付けていたことが

うかがえる。木の皮や草をテープ状にして編む網代あしろ。すだれやむしろ編みと同様の技法の

## 「コウゾ」の糸を染め、紋様を刺繍

いくつか発掘され、土器や土製品には躍動感のある不思議な紋様が描かれている。何を意味しているのだろうか。今回は千曲市指定文化財で

編布あんぎん。衣服や住居の敷物以外にも木の実や山菜の収穫、土器作りなどさまざまな場に編物は利用され、縄文人の暮らしを支えていた。古代体験パークと更級小学校の中ほどに位置する円光房遺跡からも編物の圧痕のある土器が



もあるユニークな表情と造形美を持つ「人面付土器」をモチーフにして灯取りを制作することにした。受講生のみなさんはまず、カラムシの繊維を編布技法で人

面付土器型に編んだ。人面の紋様の部分は、コウゾの皮から紡いだ糸をヤシヤブシの実で濃茶色に、またアカネの根で淡紅色に染め上げ、その糸を使って刺繍を施した。

「この土器はいったい何に使ったのかな？」「どんな思いで紋様を描いたのかしら？」などとお互いに語りつつ、一編みごとに一針ごとに各々、ゆったりとした時の流れに身を置いて手を動かした。

さらしなの里の縄文の原風景の中で、心豊かに自然と共に生きた縄文人たちの知恵と技術の一端を、編布作りを通して体感。ほのかな光を灯すと、施した人面の表情はみなさまざま。まるで命があるように、そしてうれしそうに語りかけてくる。心はほっと縄文人！

(さらしなの里歴史資料館・荒井君江)

# おらほの冠着

14

冠着山は岩の山で、所々に本体に貫入した岩が突き出て異観を呈している。児抱岩は特に目立つもので、遠く川中島平からも見えるこの山の名物であった。

数年前、「週刊上田」に「ふるさと民話散歩」を書かれていた滝沢きわこさん（お母さんが須坂の人という）から、「あの岩にはボコがいませんね」という疑問をいただいた。

## 児抱岩に山百合が咲く

実はこの岩、前々はちゃんとボコを抱く形をしていたのだが、今を去る百六十年前の弘化四年、かの善光寺地震のとき、その衝撃で抱いていたボコが抜け落ちてしまっただけで、いまのような形になったのです、と説明したことがあった。その折の状況を旧更級村初代村長の塚田雅丈さんは「抱きし児が抜け落ちて、坊城平の地中に突入せしが、また刎ね上がり、その場に現存す」と書き残している。

この岩は坊城平のアスレチック広場から五、六十段、登山道のへりに鎮座している。ボコというが、どうしてどうして、とんだ大岩である。上面の長さ約三十段、幅は十段位か、厚



さは十段以上はあるか。昔から百畳敷の大岩と言っている。この岩が刎ね上がった光景は考えるだに壮絶な光景である。

ところが、近年の松代地震で、またもや大岩が抜け落ちてきた。前の岩よりは小ぶりだが、五加の方からはよく見えたそう、土煙は天に舞い上がり、滑り落ちた跡は木も草もすべてなぎ倒され、赤い地肌となり、その後数年はそのままの姿で回復しなかった。この岩も落ちながら刎ね上がった、前の岩の下の方に収まっている。児抱岩も二つも抜け落ち、ずいぶんさみしくなったものだ。

また、珍妙なことがある。この荒れた児抱岩に七月末か八月に花の咲くのが見える。どうやら山百合の花だ。あんな岩のところになんで花が咲くのだと不思議に見ていたのだが、昨年、百畳敷岩に実見して分かった。岩の割れ目や平らな岩の面に、苔がびっしり生えて、積年の結果、厚さ十数センチにもなっている。

山にはよく霧が発生する。すると、苔はそれを吸って、私らが登った日にも水滴をボタリボタリと垂らしていた。その苔の中から一本、百合が伸びていた。一芽もあつた。苔に鳥が運んだ百合の種が芽を出し、花を咲かせたのだ。

ぼこ落ちて姥ひとり泣く月の下  
ぼこ落ちて姥ひとりなり月が友

（塚田哲男）

【編集後記】 昨年の縄文まつりでは、更級小一年生が豊穰儀礼に初めて参加しました。祭壇にきびを奉納するその姿を見て、ある年配の男性がお孫さんに向かって言っていました。「〇〇ちゃんも、来年、あれやるだよ。」

高学年の子どもたちも豊穰儀礼で猪の肉や木の実を奉納したり、仮想コンテストに出演したりと、縄文まつりには欠かせない存在です。

「人面付土器」は、灯取りの写真の右側に写っているものです。さらしなの里歴史資料館の展示室に陳列されています。友の会たよりの表紙にも毎回登場してもらっている友の会のシンボルでもあります。

「おらほの冠着」の写真は、百畳敷岩の上で立つて撮影しました。

明徳寺では五月七日、旧更級村初代村長の塚田雅丈さんが寺に寄贈した、お宝「が地域のみなさんに披露されました。雅丈さんのお宅に寄宿した文人墨客の書画や、冠着山を描いた九谷焼大皿など、更級村の原点を示す貴重な品々でした。

編集・発行 さらしなの里友の会たよりの編集委員会

事務局 さらしなの里歴史資料館

〒389-0812

長野県千曲市大字羽尾247の1

電話 026(276) 7511

ファクス 026(261) 4161